

## 「我がサッカー部」

淡水サッカークラブ 外島昭二郎 G02 (昭和30年記)

1. 「草創期」 県立神戸商科大学の前身県立神戸高等商業学校は昭和4年2月文部省令第19号をもって設置が認可され、同年4月に開校した。初年度は開校早々でもあり、一学年僅か150名の生徒数の為メンバーが揃わず、同好の士が集りグラウンドで球を蹴っていたが、翌5年2回生が入学し、往年の名フォワード大谷一二氏(名門神戸一中出身・現東洋紡相談役)を初め5名の新メンバーが加わり、我がサッカー部は神戸高商サッカー部として漸く誕生した。翌昭和6年度に関西大学高専サッカー連盟に加盟し、2部リーグに初出場したところ、順調に勝ち進み最終戦は同志社高商と全勝同士の優勝決定戦となり、2度の延長の末6:4で快勝、その余勢をかって一部昇格のチャレンジマッチでも阪大を破り加盟初年度で見事一部昇格の快挙を成し遂げた。未だに高商の大先輩方の素晴らしい思い出として語り伝えられているところである。

そして、昭和8年度関西学生1部リーグでは昇格2年目3勝2敗と3位の座を獲得し、神戸高商サッカー部の名を一躍天下に轟かしたのである。当時のメンバーを見ると、名門神戸一中を始め二中・三中以下兵庫県下の中等学校サッカー部の出身者が大半を占め正に多士済々、それなればこそ関学・京大・関大といった総合大学に伍して生徒数僅か4-5百名の専門学校のサッカー部が堂々と太刀打ち出来たのである。また人数の少ない学校(定員450名)チーム(部員20名前後)であるが故のチームワークの良さ練習密度の高さは結成当初から我がサッカー部の伝統となり戦後の今日まで引き継がれていることは特筆すべき点である。当時の代表的なプレーヤーとしてはマニラの極東オリンピックにも選ばれた前述の大谷一二氏、故前川有三氏(昭和16年没)が挙げられよう。その後昭和9・10年は辛うじて4位、そして昭和11-13年は3年連続して5位(最下位)に落ち込んだが、それでも一・二部入替戦では同志社高商と2回、昭和14年高商と1回対戦し、いずれも3点差以上で大勝、関西サッカー界での専門学校代表チームとしての座は揺るぐことはなかった。また昭和9年の全国高等商業学校全国大会の決勝戦では、師走12月30日積雪5cm以上の雪の東大グラウンドで東京商大専門学校と対戦し何と15:0で快勝して優勝カップを獲得している。参考までに、当日は雪の為にラインが引けず、コーナーフラッグの外にも、要所要所に棒を立ててラインの表示としてプレーしたそうである。

2. 「戦前の黄金期」 続いて昭和14年には我がサッカー部の輝かしい戦前の黄金時代を迎えた。同年の一部リーグではチーム結成以来1勝も出来なかった関西の名門京大を3:1で破り、強豪関学にこそ0:3で惜敗したものの念願のビッグ2入りを果たして、昭和15年正月の第4回朝日招待サッカー大会に駒を進めたのである。当日は関東サッカー界の王者明治大学に対して専門学校チームが一步も引けをとらず堂々互角に対戦し、結果は0:2で敗れはしたものの、全国サッカーファンの注目を受け絶賛を博した。当時のレギュラーを調べてみると、なんと神戸一・二・三中出身が9名に県立神一商出身が2名と戦前の一時期、中等学校サッカー界を制覇した兵庫県下の名門校卒業生が目白押しに揃っているのが印象的である。そして昭和14年の夏には翌15年開催予定の東京オリンピックの候補選手の強化合宿が慶大山中湖畔のグラウンドで計画され、当時のメンバーから、室山和・水沢淳也・小畑儀広・小川陽次の4人もが選ばれているのも特筆大書すべきであろう。残念ながら合宿出発の為神戸勢が三宮に集合したところで、オリンピックは中止となり、涙を呑んで自宅に引き返したという。今となってはホロ苦い思い出である。翌15年のリーグは2敗2分で惜しくも4位に終わっているが、その内容は京大・神大と引き分け、関学にも2:3と惜敗し善戦健闘のあとが伺われる。

3. 「戦中の苦難期」 その頃より日支事変は泥沼化し、ヨーロッパではドイツと英国の戦いにソ連も加わり戦雲俄かに急を告げ、二府県にまたがる学生のスポーツ大会は禁止され、伝統の関西学生サッカーリーグも中止の止む無きに至った。そして昭和16年12月には翌年3月卒業予定者は繰り上げ卒業となり、多くのサッカーマンが思い出のサッカー靴を軍靴に履き替えて戦線へと出動していった。昭和17年は大東亜戦争緒戦が順調に推移したせい、リーグ戦は一時再開され戦前最後のリーグ戦が行われている。当校・関学・京大・関大の常連に昭和14年高商が神大と入れ替わって昇格して参加、当校は残念ながら最下位で戦前のリーグ戦を終わっているが、サッカー部は報国団蹴球班としてその後も存続し昭和19年春の対六高定期戦で戦前の幕を閉じている。

4. 「戦後焼け跡サッカー」 戦後の焼け跡苦難の時代にも高商サッカーマンの意欲は絶えることなく、21年の2月から早くも練習再開、3月には六高(岡山大学)と西宮で戦後の第一戦を行っている。次いで京阪神府県別の関西学生地区大会が開催され、各府県上位2校計6校で秋に関西学生一部リーグが再開されることとなった。当校は兵庫で関学・神大に次いで3位であったが、京都地区の京都師範との決定戦が認められ、(その理由は判然としないが、同年春の全日本選手権関西地区予選で当校が京師に勝っている実績に因るようである。)対戦の結果3:1で勝ち創部の翌年昭和7年からの伝統を守り関西の強豪に伍して一部で戦うことになった。その後昭和22・23年は5位6位と低迷したが、なんとか一部の座を死守して次の黄金時代を迎える。

5. 「戦後の黄金時代到来」戦後の学制改革による県立神戸商科大学設立 2 年目の昭和 24 年には 4 位となり、第 8 回朝日招待サッカー大会に全商大として出場が認められた。今回までは戦後間もなくで、学生だけえはレベルがやや低い為 OB の参加を認めていた。商大でも往年の名手で当時商大の監督に就任していた水沢氏をはじめ井藤康三氏、木原慶男氏ら戦前派の先輩も参加して全東大と対戦し惜しくも 1 : 3 で敗れた。然し翌 25 年には秋の学生リーグで 2 勝 2 分 1 敗と戦前の昭和 14 年に次いで 2 度目の第 2 位の座を勝ち取り、2 年連続朝日招待サッカーに出場し、関東の覇者早大と対戦することとなった。当時の商大サッカー部は部長に昭和 5 年創立以来の名部長田中ラッセル教授が健在、そして監督として高商 OB の井藤康三氏、鬼コーチとして前述の先輩水沢淳也氏、加えて特別コーチとして神戸一中・一高・東大を経て朝日新聞運動部記者で当時の日本サッカー界の一方の旗頭大谷四郎氏（高商 2 回大谷一二先輩の令弟）を招聘、トレーニングコーチに阪神タイガースのトレーナー・神商大体育の非常勤講師も兼任し、当時日本体操界のリーダーで朝日新聞所属の松葉氏も加わった超豪華メンバーのサポート陣が整った。プレーヤーの方はこの年から現役チームとなったが、依然兵庫県下の旧制中等学校卒が大半で、それに戦後高校サッカーで活躍した兵庫高校から 2 名、更に兵庫県外から三重の名門上野高校卒が唯一人加わった新旧とりまぜの顔触れで、旧神戸一中・新制神戸高校出が 1 人も居ないのは珍しい。かわりに終戦後 5 年も経って尚陸海軍飛行兵（海軍飛行予科練習生・陸軍少年飛行兵）からの復員組が 5 名も居たのも他の大学チームには見られない特徴であり、商大チームの大きな強みでもあった。朝日招待戦前の予想は当然のことながら各新聞とも早大優位は揺るがないだろうとのものであった。第九回朝日招待サッカーは昭和 26 年 1 月 13・14 日の両日にわたり当時の関西サッカーのメッカ西宮球技場で開催された。初日関西一位の関学が関東二位の慶大に 2 : 3 で敗れた後を受け、関西大学サッカーの名誉を賭けて早大と対戦。後半 7 分にして 0 : 2 の劣勢を 19 分 26 分 39 分と連続 3 得点で予想を裏切って大逆転の末快勝を果たした。まさに高商・商大の歴史を飾る快挙でありました。

6. 「痛恨の二部転落」その後翌年はリーグ 3 位、次いで 4 位、5 位と低迷しながらも落日の栄光を懸命に守ってきたが、昭和 29 年最下位決定戦で同志社に敗れ、二部入替戦で前年二部転落の兄貴分神大にも敗れ遂に二部転落となった。以後は現役・OB の懸命の努力にも拘わらず、時代の流れには逆らえず、再び一部に復帰することもなく二部三部を転々として今日に至っているが、50 有余年の歴史を持つ商大サッカー部は今尚健在、意気盛んである。戦後次々と出来た多数の大学、そのマンモス化傾向、一部大学運動部の特殊な動き等の中にあつた学生数僅か千五百人余りの公立の単科大学の運動部として本来の学生スポーツの伝統を純粋に守り続ける我が神商大サッカー部が自信と誇りをもって今後も活躍することを祈りつつ筆を置く次第である。